

王朝文学における求愛ストラテジーの考察

Margaret Childs

今の研究は、カンザス大学で王朝文学を教えている際に、アメリカ人の学生が「源氏物語」を読むに当たって、光る源氏を悪党であると解釈する事が多いという現象をきっかけに始まった。アメリカ人の学生に多いこの勘違いを解決しようと、王朝文学の中の求愛ストラテジーを研究しはじめたというわけであるが、実際に、英語に翻訳された文書と原文とを注意深く読み比べてみると源氏の女性に対しての攻撃的な行動が必要以上に強調されていることに気づいた。英訳で読む限りの源氏は本当に卑しい男であるかのように見られるのだが、「源氏物語」の原文をよく読むとそういう印象は受けない。よって、翻訳者の偏見がこのような問題を引き起こしているのではないかという点を、以前論文で取り上げた^①。その過程で明らかになったことの一つは、ロマンスと形容されることの多い王朝文学の世界で、男性からの求愛は実は女性にとってかなり不愉快な経験だったようであるということだった。王朝文学の中の男性は様々な時には強制的とも思われるかけひきをしている。

王朝文学の舞台となる平安時代中期、後期に於いて、社会的にも経済的にも女性が男性より不利な立場にいたということは、明白な事実であるが、王朝文学の男達が恋愛関係においてどのようにその力を行使したかについて研究することは興味深く意義あることであると思う。今日の公演では、特に王朝文学の求愛ストラテジーを男性と女性の視点から考察し、その恋愛観のずれについて考える。

先ず気になるのは、強制的な肉体関係だ。身分が違うと強姦はかまわないと

言う態度が見られる。「夜半の寢覚」で内大臣は婚約者の妹の寢覚の上が親類を訪ねている時に彼女を垣間見て、目下の者と思って気軽に強姦した^②。「とりかえばや」で帝が尚侍を抱き締める時に、尚侍がこう思う：帝だから好きなようにできる。抵抗しても無駄だ^③。この様な例から、平安時代の宮廷社会には、身分の高い男が身分が劣っている相手ならばどのように扱ってもかまわないという態度があったと伺うことができる。

裏を返せば、宮廷社会には、強姦は許されるべき行動だという概念が存在したわけであり、ここに当時の女性の立場の辛さが見受けられる。特に、弱点のある美人の場合に強姦を認める考え方が顕著に表れるようである。「浜松中納言物語」では、中納言は尼になった妻に対して性欲を感じるのであるが、普通の男ならそのような俗欲を抑制できる筈はないと考え、自分の抑制心を自慢する^④。「夜半の寢覚」では帝は内大臣と寢覚の上の関係は強姦で始まったと想像する。両親のない美人を垣間見たら抑制できる男性はいない筈だと帝は道理的に考え出す訳である^⑤。そして、帝の考えはほとんど当たっているのである。続いて、帝は寢覚の上を強姦する機会を逃してから、自分の欲望を抑制したことを後悔する。衝動的に肉体関係をもっても世にはきっと普通のことだと思われたらろうと帝が恨んで言うのである^⑥。男性が、自分より身分が低かったり、親戚や後ろ楯のない女性の肉体を自分のものにするのがいかに「道理」にかなったことであつたかということがここに顕著に表れている。

それから、男性は突然女性の部屋に入り込んで女性を怖がらせることがよくある。これだけでも女性には辛いと思うが、侵入後、誘惑する場合はあれば、強姦する場合もある。それから、面白い一つのケースはその泣いている痛ましい女性の姿を従順性ととらえ、無理やりに情交する男性だ。

「源氏物語」では、源氏でさえ女性の部屋に入り込んだことはよくある。空蝉も朧月夜も源氏に近寄られて、最初は恐かったのである^⑦。どうして彼は女性を怖がらせるのだろうか。弱さは魅力の一つであると思われたからだとは私は推測する。病気や疲れや悲しみで萎れる人は美しいという概念は王朝文学に貫か

れている。恐くて怯えている様子を弱さの一種と見て、女性をそういう状態にさせておいて好きになるわけである。

源氏は女性を恐がらせた後、必ず女性を安心させようとして誘惑する^⑧。源氏はこの面において批判されないべきだが、他の男性は遠慮しない。明確に交情したくない女性を勝手に誤解するか、その抵抗を無視することがある。「源氏物語」では柏木は女三の宮が目上で冷淡な人だろうと思いついて彼女の部屋に入り込むと、女三の宮の恐怖を従順性と受け取る。柏木は自分を抑制するつもりだったが、そうできなくなる^⑨。「とりかえばや」では宰相中將は四の君の部屋に入り込む。宰相中將が夫ではないと分かると四の君は恐怖におののいて泣くのであるが、宰相中將はそれを無視して情交する^⑩。

前述の「とりかえばや」で、もう一つ面白いのは、宰相中將は四の君の冷たさを嘆いて自分をかわいそうに見せ、やっと四の君に愛してもらおうという点だ^⑪。今度は男性の弱さに女性が引かれるわけである。出合いの時に宰相中將に無理やりに体を求められた事の辛さを忘れて四の君が彼を愛し始めるということに、たいていのアメリカ人の学生は驚く。王朝文学においては、強姦は恋愛という感情の表現であり、感情というものは理性で押さえられるものではないという概念があったために、つまり強姦は許すしかないものだとしていた。そのような概念を知らないアメリカ人の読者には、それは理解できない理論かもしれない。

王朝文学の求愛ストラテジーを考察するに当たって、もう一つおもしろいのは、男性の求愛の画策には「脅迫」が時々見られる点である。女性は好きになられて命が危なくなる場合もある。人の恋に応えなければ、その人の生霊に呪われると脅かされたのは「問わず語り」の二条である。「問わず語り」では、有明が二条にほれてしまうが、二条は彼を退ける。二条のおじである高明は手紙で有明は非常に苦しんでいるから二条が危ないと言う^⑫。その後、高明の予告どおり二条は病気になるのだが、その原因は有明の生霊に他ならないと彼女は思う^⑬。数年後、後深草院は高明と同じようなことを言う。「歴史にこういう例

は他にあるし、前にやられたから、有明の恨みが増さないように、彼の愛に応えたほうがいい」というようなことを言って、その二人の関係を促進する¹⁴。ようやく二条は有明が好きになるのだが、彼女が有明に心を開いたのは純粋な恋愛感情からではなく、むしろ危険を逃れるためだった事に注目したい。

それから、恋を返さないのは私の死の原因になるとか罪を犯したことになると思わせる例はいくもある。初めて会った時に源氏は藤壺に「愛してくれないから死んでもいいと思うようになった」と言ったら、藤壺は哀れみをかけて肉体的な関係を許し、妊娠してしまった¹⁵。二回目に会った時に源氏は同じようなことを言った：愛しながら死んでしまえば、その執着のために往生できないのは藤壺の責任にもなる、と¹⁶。藤壺が源氏のこのような強い要求に屈しなかったのは、彼女が精神的に強くなったからだ。有明も二条に片思いで死んでしまいそうだと言う¹⁷。そして柏木も女三の宮に「愛してくれないのは残酷で、私は気が狂ってしまいそうだ」というようなことを言う¹⁸。この二人の女性は結局この厳しい威圧に負けるのである。

そして、不合理な概念を使う場合もある。というのは、お互いの恋ならその愛情の関係を御縁と思うことは合理的であるが、片思いの場合には御縁と思うのはおかしい。一本の木の陰に宿り、同じ川の水を汲むことは御縁だとよく言う。こういう行為は互いに自発的な行為だ。しかし片側だけの行為の場合に御縁というのは不合理だ。それにもかかわらず、求愛戦略として前世からの縁だから私を愛してくださいと言う男性は随分たくさんいる。「源氏物語」で、源氏は空蝉に¹⁹、「とりかえばや」で、宰相中將は四の君に、帝は尚侍にこのようなことを言う²⁰。このような例は限りなくある。

男性が求愛の戦略として頻繁に使用する「前世からの縁」という表現についてさらに詳しく見てみると、おもしろいことに、女性が「御縁だ」という時には、無理に関係を要求されて、それを諦めているという意味で言う場合が圧倒的に多いことに気づく。例えば、「とわずがたり」で、二条が有明の愛情を受けて困ったという気持ちで、独り言でこの出会いは縁なのだ、と言っ

ている。²¹「浜松中納言物語」で、中納言が唐后と愛を契る時に中納言は嬉しくて「前世からの縁だ」と言うのであるが、唐后はその関係に無理矢理に巻き込まれたという気持ちで悲しんで「縁だ」と言う。²²ここにも、男女の恋愛に対する態度の違いを見て取ることができる。

もう一つの女性にとって不愉快なことはいじめの対象になることだった。愛情を返さない女性を批判したり攻撃したりする人は非常に多い。私の感覚では、恨みや批判を言われたらそれを言った人を好きになることはなく、むしろ嫌いになると思うのであるが、日本の文化では文句や不平は愛情の表現だと言う概念があるように思える。もちろん、どういう調子で文句を言うかはその文句の解釈に大事だ。文句をやさしく言えば、愛の表現と素直に受け取るのはおかしくないだろう。例えば、「蜻蛉日記」では、道綱の母は息子を慰めるつもりで、息子をけなすような調子で話している。²³「浜松中納言物語」では、中納言は義母が病気になったことを知らせてくれなかったことについて恨んで文句をいう。²⁴時代はずれの例を許して頂くなら、極端な例は西鶴の「男色大鏡」にある。増田甚之介が森脇権九郎に本当につまらない七つの不平をくどく書く。²⁵深く恨みながら好きだということになる。権九郎はその手紙を嬉しく受け取るのであるが王朝文学を精読してみると、不平をしつこく言われる女性は非常に窮屈に感じていたことがわかる。こういう愛の不満足のことばを性によってどんなに違うように受け取ったことは「夜半の寝覚」であきらかになる。帝が呪い、恨みの言葉をたくさん連ねて寝覚の上書きよした手紙を内大臣が読み、こんなすばらしい手紙を受け取って付き合いたくならない女はいないはずだと内大臣が思うのだが、寝覚の上はまったく無関心だ。²⁶

まず求愛の初期の段階で行われた批判を取り上げる。求愛する男性はためらう女性が恋文の返事をしないと必ず不平を言っている。返事をしないのは子どもっぽい、失礼だ、残酷だ、などと批判するのである。求愛している男性だけではなく、ためらう女性の両親や付き添いの女なども、躊躇する女性に恋文の返事を書くようしつこく勧める。手紙に返事しない者は地獄に落ちるという考

えもあったようだ。

手紙の交換は求愛の大事な一段階だった。手紙を交換しない限り、求愛は進まない訳であるが、この段階に於いても女性は大変不利な立場に置かれていた。受け取った手紙に返事しないのは許されないし、女性がいくら落胆させるような手紙を書いても、その内容は無視され、男性は手紙さえもらえば励まされたと受け取る。そしてその手紙に男性が又返信を送ると、女は返事をしないわけにはいかない。つまり、この「悪循環」はいつまでも続くことになるわけだ。こうして、女性はいつまでも同じ困った状態にいる。だから、返事しないのを許さないというのはほぼ男性を断ることを許さないと言う意味になるわけだ。

この様に、半ば強制的に、いやだと思いつつも、丁寧に返事を書いて送らざるをえない状況におかれた女性の一人は「夜半の寢覚」の寢覚の上だ。帝の恋文に応えなければいけないと思っていやいやながら返事を出す²⁷。身分の高い男性の恋文に返事しないことはどんなに稀なことだったかということは「とわずがたり」でも伺うことができる。二条は亀山院の恋文に応えたくないために住まいを移動して隠れるまでするのである²⁸。女性が恋文の返事をしない事に対する批判への心配はいかに切実だったかという事実が王朝文学にはこの様にはつきりと描かれている。

手紙を通してでも直面しても恋愛に応えない女性に不平を言うという求愛ストラテジーは有効的だった。王朝文学の世界では情け深いことが何よりも大事にされ、良きものとされていた。こういう環境で冷淡だと批判をうけるのは辛かったに違いない。「浜松中納言物語」で中納言と大弐の娘の関係はその一つの例だ。中納言は大弐の娘と結婚する機会を逃し、大弐の娘は母親に衛門の督と結婚させられる。その後、中納言が訪ねて、ふられたと恨みを言う。(こういう不当な告訴も女性はよく受けるが、今はそれを取り上げない。)大弐の娘は中納言と契りを交わすのはいけないと思いつつも、恨まれてつらいから、柔和に屈服する²⁹。

もう一つの威圧的な求愛ストラテジーは優しい言葉と厳しい言葉を交互に使

うことだ。何度も、親切にされたり虐待されたりすることは人を混乱させて弱くする。今は警察はよくこの手段を容疑者の尋問に使うそうであるが、同じような手段が王朝文学の中で求愛ストラテジーにも使われていた。例を挙げるならば、先ず、「源氏物語」で、朱雀の帝が朧月夜を恨んだり、あわれ深く変わらぬ誓いをしたりする³⁰。「とわすがたり」で後深草院も二条に結婚の夜に恨んだり慰めたりする³¹。

女性が求愛を受けることにより精神的苦痛を多く経験したという例について考察してきたが、こういう威圧的なストラテジーを使った男性をどう解釈すべきかここで考察してみよう。王朝文学の世界について二つのことを忘れてはならない。一つは、王朝文学を鑑賞する際に、現代の行動規範をものさしにして彼らの行動を短絡的に批判するのではなく、彼らの時代の価値観をふまえて解釈することが大切だということだ。王朝文学では感情の豊かさが高く評価された。反対に冷静な野心を卑しいものという価値観があった。このことは、「源氏物語」で、読者からの羨望を受けるのはもちろん光る源氏であり、野心家のこき殿の女御は憎まれ役として物語りに存在したということをもみても明らかである。もう一つは恋愛は抑制できないものと思われたことである。例はいくらでもあるが「とわすがたり」の有明のケースが目立つ。彼は三年間も二条への愛情をあきらめようとするが、どうしても止まらないから、自分の身を恨むという³²。それから、日本語では、「愛情が湧いてくる」と自動詞を使って表現する。愛情というものは、あたかも自然に「わいて」くるものであり、わいてきたら、支配できない。この観点からみても、愛情の対象になりたくない女性は仕方のない立場にいた。

そこで、もう一つの疑問が出てくる。女性は男性の愛情にどうしてこんなに抵抗したのだろうか。男性の観点から考えるなら、どうして威圧的な求愛は必要になったのだろうか。まず、女性が男性の求愛に抵抗するのはある程度社会の慣例であったといえる。「とわすがたり」で前の斎宮もささがにの女も後深草院の欲望をあまり早く満たすので後深草院は不満を感じるというところにも、

それがはっきりみえる³³。しかし、堅く抵抗する女性は王朝文学に大変多くみられ、社会の慣例ということだけでは簡単に説明できない。なぜ彼女たちは、男性の求愛を受け入れることを拒み続けたのだろうか。その疑問について再度考察してみる。

実は恋愛と性的関係は贅沢なものだった。一夫多妻制の社会は、男性に有利な制度であった。男性は出世のために結婚をすれば、その他に恋愛関係をいくら持っても良い状態だ。しかし、女性の結婚は出世の唯一のチャンスであり、結婚相手をうまく選択する必要がある。女性は一夫一妻制を好んだという印象を「源氏物語」や「蜻蛉日記」で受けるが、女性には一夫一妻制は男を占有する意味というより、地位の確保や尊敬を得る方法だった。しかし、感情を重んじる宮廷社会では、それをそのまま言うのは、好ましいことではなかった。王朝文学で、これを正直に言うのは寢覚の上ぐらいである。寢覚の上は内大臣の熱い恋愛をどうして断るかという、彼はもう寢覚の上より目上の姫ぎみと結婚しているからだという。その姫ぎみに劣るのが耐えられない³⁴。尼になったら良かったという気持ちを表す。その理由は、修行したいからではなく、面目を保つためなのだ³⁵。帝を断るのも、帝がなさる待遇は侮辱だからだ。正式なプロセスを経ず、いきなり部屋に入り込んだことを堪え難い無礼と思った³⁶。女性の本当の希望は恋愛ではなく、尊敬してもらえる地位だったという証拠は他にもある。他の女性を嫉妬する女性の典型的な例を見てみるとこのことは明らかになるであろう。身分の高い女性はほとんど嫉妬をしない。「源氏物語」では、葵の上は源氏の恋人を妬まない。六条御息所の嫉妬心が生んだ生霊が葵の上も夕顔も殺したと思われているが、実は、私はそう思わない。丁寧に読むと、六条御息所は、葵祭りでの車争いで恥をかかせたことを恨んで、葵の上に取り付く³⁷。夕顔の場合、源氏の侮辱の直後に夕顔に取り付く³⁸。紫の君の最後の病氣も源氏が六条未安所を批判的に話した直後に起る³⁹。「夜半の寢覚」で后の中の宮は帝の恋愛関係にある程度支配する。新しい恋人が参内したら、一緒にさせたり、させなかったりする⁴⁰。そして帝が寢覚の上の片思いのために苦しんで

いると中の宮は可哀想に思って、援助する^④。

この様な例を見てくると、王朝文学では、女性が女性を妬むのは、主人を占有したいからというより、地位が危なくなるからだということが分かる。

この様に、求愛されて女性がためらうという現象と、妬むのは目下の女だけだということに注目してみると、王朝文学における女性にとって恋愛がどのような意味を持っていたかということがわかる。男性は恋愛を求めている一方で、女性は安定した地位の確保や尊敬を求めていたところに男女の恋愛観のずれがあったと推測できるのである。

[注]

- ①Margaret H. Childs, "The Value of Vulnerability: Sexual Coercion and the Nature of Love in Japanese Court Literature," *The Journal of Asian Studies* 58, no.4 (November 1999): 1059-1079.
- ②鈴木一雄、「夜半の寝覚」新編日本古典文学全集28 (小学館1996)、p.30.
- ③三角洋一「とりかえばや」新編日本古典文学全集39 (小学館2002)、p.451. Rosette F. Willig, *The Changelings*, (Stanford, Stanford University Press, 1983), p.196-197.
- ④池田利夫「浜松中納言物語」新編日本古典文学全集27 (小学館、2001)、p.193. Thomas Rohlich, *A Tale of Eleventh Century Japan: Hamamatsu Chūnagon Monogatari*, (Princeton University Press, 1983), p.132.
- ⑤鈴木一雄、p.258. Carol Hochstedler, *A Tale of Nezame: Part Three of Yowa no Nezame Monogatari*, (Ithaca, N.Y., China-Japan Program, Cornell University, 1979), p.35.
- ⑥鈴木一雄、p.327. Hochstedler, p.82.
- ⑦安部秋生「源氏物語」1、新編日本古典文学全集20、(小学館1994)、p.99; 356-357. Seidensticker, p.42; 152.
- ⑧今井源衛は「源氏物語への招待」(小学館、1992)、pp.130-148で「源氏物語」の中の男女の情交の大半は強姦だと言っているが、私はそう思わない。
- ⑨安部秋生、「源氏物語」4、p.224. Seidensticker, p.613.
- ⑩三角洋一、p.207-208. Willig, p.44.
- ⑪三角洋一、p.216. Willig, p.49.
- ⑫久保田淳、「とわずがたり」新編日本古典文学全集47、(小学館1999)、p.311. Karen Brazell, *The Confessions of Lady Nijō* (Garden City, N.Y.: AnchorPress/Doubleday, 1973), p.89.
- ⑬久保田淳、p.314. Brazell, p.91.
- ⑭久保田淳、p.355. Brazell, p.123.
- ⑮安部秋生、「源氏物語」1、p.231. Seidensticker, p.98.
- ⑯安部秋生、「源氏物語」2、p.112. Seidensticker, p.197.
- ⑰久保田淳、p.356. Brazell, p.125.
- ⑱安部秋生、「源氏物語」4、p.227-228. Seidensticker, p.615.

- ①9 阿部秋生、「源氏物語」1、p.43. Seidensticker, p.102.
- ②0 三角洋一、p.207; 450. Willig, p.43; 196.
- ②1 久保田淳、p.357. Brazell, p.125.
- ②2 池田利夫、p.70-71. Rohlich, p.75-76.
- ②3 菊池靖彦、「蜻蛉日記」新編日本古典文学全集13 (小学館1995)、p.231. Sonja Arntzen, *The Kagerō Diary*, (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1997), p.235.
- ②4 池田利夫、p. 293. Rohlich, p.173
- ②5 宗政五十緒、「難色大鏡」新編日本古典文学全集67 (小学館1996)、p.316-318. Paul Schalow, *The Great Mirror of Male Love*, (Stanford, Ca.: Stanford University Press, 1990), p.71-73.
- ②6 鈴木一雄、p.354-355. Hochstedler, pp.101-102.
- ②7 鈴木一雄、p.245. Hochstedler, p.25.
- ②8 久保田淳、p.296. Brazell, p.77.
- ②9 池田利夫、p.239. Rohlich, p.151.
- ③0 阿部秋生、「源氏物語」2、p.197. Seidensticker, p.235.
- ③1 久保田淳、p.201. Brazell, p.6.
- ③2 久保田淳、p.366-367. Brazell, p.132.
- ③3 久保田淳、p.207;305. Brazell, p.59; 85.
- ③4 鈴木一雄、p.273、289. Hochstedler, p.46, 56-57.
- ③5 鈴木一雄、p.415、432. Hochstedler, p.145, 155-156.
- ③6 鈴木一雄、p.275; 281-282. Hochstedler, p.47; 51.
- ③7 安部秋生、「源氏物語」2、pp.23、36. Seidensticker, pp.160, 167.
- ③8 安部秋生、「源氏物語」1、p.163. Seidensticker, pp.70-71.
- ③9 安部秋生、「源氏物語」4、p.209. Seidensticker, p.608.
- ④0 鈴木一雄、p.244, 246. Hochstedler, pp.25, 26.
- ④1 鈴木一雄、pp.363. Hochstedler, p.107.

* 討議要旨

瀧田真奈美氏は、源氏が紫の上を引き取ったときの気持ちを尋ねた。発表者は日本文化の愛情の典型である守る形の愛情からで、親のない子の親代わり兄代わりの気持ちであると答えた。

ノリコ・トゥンマン氏は、源氏物語の中に平安女性の立場に対する批判が書いてあるかと尋ねた。発表者は、批判ではなく、女性にとって辛い時代における人間の感情を描きかかったのだと答えた。

武井協三氏は、源氏物語は強姦の物語なのか、又、紫式部は強姦を肯定していたのかと尋ねた。発表者は、翻訳による誤解のためそう思われているが、強姦が日常的に行われていた状況の中では光源氏は良い人間として描かれていると答えた。

神野藤昭氏氏は、①源氏物語における求愛のあり方は現実を反映しているか、②源氏物語の英訳はサイデンステッカー、ウェイリー、タイラーによってなされているが、どの翻訳に一番即物的攻撃的印象をもち、またどれが一番教材として使われているか尋ねた。発表者は、①想像の部分が多い、②サイデンステッカー訳の省略本を教材として使う事が一番多いが、問題も多いと答えた。